

巻頭言

安全対策と人の心

リスクを減らせばリスクをとりに行く心理

芳賀 繁



安全対策で事故リスクが小さくなると、人間が警戒心を緩めたり、あえて危険な行動をとることによって、リスクを高めてしまう現象がある。それを「リスク補償行動」という。

例をあげよう。

曲がりくねっていて見通しの悪い道路を付け替えて、直線化すると、そこを通るクルマのドライバーは速度を上げて走るようになる。照明のない夜道を安全に走れるよう赤外線で人を検知する装置をつけたクルマは、夜道を以前より速く走るようになる。工事用の仮設足場からの墜落事故を防ぐため、足場の幅を広げると、足場を歩く作業員の速度は速くなる。足場に手すりをつけるとさらに速くなる。確認ミスを防ぐためにダブルチェックを採用すると、一人ひとりの確認がよい加減になる。雪崩に埋まった時にいち早く発見して救助してもらうためのビーコン（電波発信機）をリュックに入れて雪山に入る登山家が、雪崩の危険が高いところにも平気で入って行くようになって困ると、ビーコン普及活動をしている人がぼやいていた。

経験や訓練で人の能力が高まった場合にも同様の現象が起きる。より大きなリスクを乗り越える力があると思えば、人はより大きなリスクを進んでとろうとするのである。スキーが上達すれば、より急な斜面を高速で滑ろうとし、作業に熟練すれば、より速く、あるいは他の仕事と並行して、その作業を行おうとする。北欧では、ドライバーに凍結路面でのスキッド立て直し訓練を義務化したために、却ってスキッド事故が増えたことがある。訓練を受けたドライバーが凍結した道路を以前ほど慎重に走らなくなったからである。

人はなぜリスクをとりに行くのか。それは、リスク

の裏側にベネフィットがあるからである。いや、ベネフィットが表側でリスクは裏側というべきか。食品添加物にも予防注射にも原子力発電にも自動車にも鉄道にもリスクはあるが、大きなベネフィットがあるからこそ人は使い続ける。

安全対策でリスクが減ったとき、それだけ余分にリスクをとってベネフィットを稼ぎに行くのがリスク補償である。ベネフィットには、生産量、効率性、利便性、快適性、時間の短縮、負担の軽減（手抜き）などがある。リスク補償行動は意図的にも（例＝速度の増加）、無意図的にも（例＝警戒心の低下）起こる。

では、安全対策は意味がないのだろうか。いや、そうではない。「もっと安全でありたい」「今の安全水準では不安だ」と感じている人はリスク補償を起こさないで、安全対策を安全のために利用する。「今のままで十分安全だ」「もっと効率を高めたい」と考えている人は、安全対策を効率や手抜きのために転用する。技術的安全対策を生かすも殺すも人の心なのである。工期短縮、コスト削減の圧力が高い状況も、安全対策を効率化に流用したい誘惑を生む。

「安全は人の心、安全への意欲にかかっている」と言うと、技術的安全対策よりも「安全意識の向上」など人の心に訴える対策を推奨しているように聞こえるかもしれないが、この二つは二者択一ではない。システム全体を改善する視点からの安全対策（設備だけでなく、教育・訓練や作業手順の変更も含む）を実施すること、人の心に働きかける施策を同時に行うことにより、安全対策が安全性を向上させる力を持つと考えられるべきである。